

風化させてはならない

校長 吉田 隆

無人の住宅街、主人を失った店舗、雑草に覆われた延々と続く荒地：八年七ヶ月の歳月が、活気ある町並みや青々とした田園を荒涼とした風景に変えてしまった。

冬の足音が聞こえ始めた十一月初旬、東日本大震災の被災地を視察する機会を得た。福島県小学校長会のご案内で、福島第一原子力発電所の現状や、被災地校の先生方と子どもたちの姿にふれることができた。

いわき市から福島第一原発に向けて北上する。双葉郡大熊町に入り「帰還困難区域」という看板が見えたとき、バスの車窓に映る風景が一変した。

冒頭の町の姿である。一人の手の入らない土地は、これほどに姿を変えてしまうのか―国道六号線は全通し、原発の廃炉作業も徐々に進んでいるニュースを耳にしてきたが、それは、福島の現実のほんの一部であることを思い知らされた。大半が「帰還困難区域」となっている大熊町と双葉町では、依然として約一万六千人の住人が、我が家での平穏な生活を奪われている。

福島第一原発内の放射線量は、かなり低下し、バスの中ではあるものの防

護服なしで視察できるようになった。しかし、現在、四千人の作業員が廃炉作業に従事し、この先三十年以上の年月を要するという。テロ防止のための厳重なセキュリティ対策を講じ続けながら：

帰還が許された地域も様々な課題を抱えている。浪江町の「なみえ創成小学校」を訪問した。全校児童十四名。現在、浪江町の児童数は、二本松市で震災後に再開した学校に在籍する二名を加えて、総勢十六名である。震災前、千人を超えていた児童数が1/70に激減している。

このような厳しい現状に直面してもなお、先生方は「ふるさとを見つめ直す心」「少人数だからこそできる一人一人を生かす学び」を学校づくりの根幹として、不屈の精神で子どもたちと向き合っている。それに応える子どもたちの表情が未来への希望を映し出していた。

現状を知り得た者の責務として、本紙面でお伝えさせて頂いた。この現状をそれぞれの立場で受け止めてもらうことが、持続可能な未来社会を築くための糸口になることを願う。

震災の記憶を風化させてはならない。